

彙報

(理事會)

昭和三十三年一月二十五日午後一時より大谷大學會議室に於て理事會が開かれた。この會合では、第三回大會のおり一應の了解を得ていた。

第四回大會開催の場所を高田派本山に依頼する件

に就き、正式に高田派より承諾の御返辭を受けるとともに、大會の實行案に就いて、特に高田派の理事との間に協議打合せがなされた。

(理事會)

四月二十五日午後一時より大谷大學會議室で本年度第二回目の理事會が開かれた。この會合では、一月の理事會の協議にもとづいて高田派關係役員より提出された第四回大會實行の具體案につき、主として次のごときことが議題として討議された。

- 1、研究發表者の員數及びその詮衡方法に就て。
- 2、法寶物展観出品物に就て
- 3、大會參加費に就て
- 4、座談會開催に就て

①の件に就ては、場所及び時間の制約等の點を配慮して、特に今回は發表者の人數も十名に限ることにし、その詮衡方法も理事會に一任していただくことになった。

②に就ては、高田派役員より「教行信證」關係のものと眞佛上人關係のものを展観に供したいとの申出があり、御一任申上げることになった。

③の件に就ては、會員の參加費と一般參加者との差額をつけてはとの意見が出て、熟議の上會員と學生は前回通り(百圓と五十圓の割合)一般參加者は百五十圓いただくことになった。④は、今回の新しい試みとしてシンポジウムを催す議案が提出され、主題及び時間等に就て熟議の結果、次のように決定された。(主題、)教行信證後序に就て(時間、)二十五日午前十時より十一時半迄(その他、)今度の大會から、大會形態も外形的面よりも内的質的な充實を期するようにとり行うということが申合はされた。

(小委員會)

一月及び四月の理事會の後適宜に小委員會が開かれ、大會準備

備のうち特に事務的な面に就ての打合せがなされた。

眞宗連合學會第四回大會記要

一昨々年、第一回大會を高田山專修寺で開催した常連合學會は、一昨年は西本願寺、昨年は東本願寺で、それぞれ第二回・第三回の大會を開いたが、本年は再び高田山專修寺で、その第四回大會を催すことゝなつた。

大會前日の五月廿五日午後から、名畑應順理事長をはじめ、役員あいついで參集、法主親下の特別のおぼしめしにより、大會役員および遠來の結城令聞・多屋頼俊両博士のほか、多數の東西學匠に法寶物の内拜がゆるされた。

一同は休憩所にあてられた賜春館北の間で少憩の後、午后六時から御對面所で懇親會が開かれた。出席者は三十四名、高田派法主親下・同法嗣殿、木邊派法主木邊孝慈親下も御臨席になつた。川瀬和敬理事の司會で、誓山信曉宗務總長の挨拶、高田派法主親下の御祝辭があり、酒杯の献酬が進むにつれて談論風發、和氣堂に満ち、午后八時過、和やかな會合を終り、つゞいて付書院で役員會を開き、種々の案件を協議して、九時三十分散會した。

大會當日の廿六日は朝から快晴、前夜本山ひざもとに宿泊の會員一同は、なりひびく梵鐘の聲と共に如來堂に參集、晨朝の法要にあい、ついで御影堂に參詣、その後食堂で「高田山」と

黒字で書かれた朱碗朱膳による朝食をいたゞいて、緑の色深い庭園を散歩し、有名な安樂庵茶室に入つて、宗旦古流宗家、教子様の御點前で、抹茶をいたゞいた。

〔討論會〕（シンポジウム）

午前九時二十分から、大講堂で、名畑博士司會の下にいいよ大會の本コースに入つた。最初に本會初めての試みとして、「シンポジウム」の形式が採上げられ、主題は『教行信證』後序を中心とすることゝした。初めに司會の名畑博士によつて後序の本文の朗讀がなされ、次で宮崎國遵博士による歴史の面からする既往の研究の概説があつて、岩田繁三・日野環・石田充之・生桑完明諸氏の發言があり、次に稻葉秀賢教授による教義面からする問題點の指摘があつて、松野純孝・佐々木徹眞・立花淨見・日野環・石田充之・結城令聞・石田瑞麿・稻葉秀賢・森脇一猷・藤島達朗諸氏の發言があり、論議は正に高潮に達したが、惜しくも豫定時間となつて十時五十分で打ち切られた。

本大會にこのシンポジウムの方法が採擇されたのは、高田派法主親下の發案によるものであつたが、効果は頗る大で、時間が足りない程であつた。

〔會員總會〕

引續き別室で理事會を開き、次期理事長を定めた上、十一時から總會が開かれた、佐藤哲英理事の開會の辭があつて、名畑理

事長の調聲で嘆佛偈・念佛・廻向の勤行があり、理事長の挨拶
高田派法主猗下の御祝辭について、議長の推挙があり、生桑理
事が議長席について議事を進行した。

まづ稻葉理事から、経過報告があつて後、

(第一) 次期理事長の件、

大江淳誠博士を推挙することを承認。

(第二) 本會の擴充發展に關する件、

役員及會員舉つてこれが達成を期する事に一致。

(第三) 次回開催地の件、

佛光寺を會場とすることに決定。

かくて藤島理事の閉會の辭を以て總會を終つた。

晝食後、會員一同兩堂參拜、御影堂では維那玉樹眞梁評議員
の奉仕で、聖人眞影の臨時開扉が行われ、向拜の階段で記念撮
影の後、賜春館で末尾記載の法寶物(解説、生桑完明理事執筆)
を拜觀した。

〔研究發表〕

午後一時三十分から再び大講堂で、宮崎圓遊・佐々木求己・
森脇一猗三氏の司會の下に、左記研究發表が行われ、満堂靜聽
五分間づゝの質問も活潑に應答せられ、豫定よりおくれて四時
五十分によろやく終了、平松令三評議員から挨拶があつた。發
表論文は本誌掲載の通りであるが、論題と發表者を摘記すれば

次の如くである。

- ▽四種三昧の本尊について 石田瑞麿
- ▽行信兩卷の見方 大江淳誠
- ▽非僧非俗の實踐的意義 川瀬和敬
- ▽眞宗に於ける傳統の本質 禿 諦住
- ▽大小一揆 北西 弘
- ▽五念五正の關係 小島敎成
- ▽眞宗信者の社會的態度 西光義敏
- ▽親鸞研究に於ける時代超時代兩契機の分析二葉憲香
- ▽大谷派における異安心調理の方法 松谷了玄
- ▽造惡無碍者と親鸞 松野純孝

研究發表終了の後、別室で役員會が開かれ、「眞宗研究」第
三輯編集に關する打合せを行つた。

東は東京から西は佐賀にわたる全國的な參會者を網羅した盛
大な第四回大會は、こゝにその幕をとち、關係者一同愉快禁じ
難いものがあつた。

なお當日參加の會員には、記念品として、専修寺所藏「教行
證文類」總序の文の玻璃版一葉(解説付)が贈られ、また特別
拜觀のしおりとして、「専修寺法寶物解説」その他「研究發表
要項」「高田本山境内略圖」等が配られた。

〔展覧法寶物〕

教行信證の部

〔一〕顯淨土真実教行証文類〔鎌倉時代写本〕六冊

本書は、開山親鸞聖人撰述中の根本聖典として、本宗の内外からあがれており、眞宗の要義を網羅しておる。近來その成立について、種々論議がくりかえされておる。聖人の幾多の撰述中にあつて、本書の奥書のないのはめずらしいことで、論議のおこるのも餘儀ないことであろう。自筆本として現存する唯一のものは、東本願寺現藏の、いわゆる「草稿本」である。聖人七十五歳の時、尊蓮に本書の見写をゆるされた記録と、その系統の版本はあるが、原本はのこっていない。いま本山に傳來する『教行證』は「清書本」「眞筆本」「高田本」などと稱していたものであるが、聖人八十三歳の時、專信に見写をゆるされたものと確認された。專信の手写本は、「草稿本」に次ぐ貴重な存在として特に重んぜられることとなつた。本書は鳥の子を使い、半葉に七行、縦九寸二分横七寸一分、袋綴になつてゐる。

「教文類」「信文類」「眞佛土文類」の巻尾に、別筆（願智上人眞筆）で「親鸞御入滅、弘長二歲壬戌十一月廿八日午時、御歳九十歳也、同廿九日午時、專信（遠江國池田住僧）願智（下野國高田住僧）御舍利藏畢」という識語がある。師父故忍明が

寶庫で發見した目録により、「化身土文類」の巻尾には、前記の識語と共に、その次前に書写年時を誌した「以彼六卷草本書之、筆師專信之、建長七歲乙卯六月廿二日午時畢書之」という筆者の奥書があつたことをあきらかにした。

〔二〕顯淨土真実教行証文類〔室町時代写本〕八冊

本書は、昨年寶庫の一部を整理中に發見された写本で、「信文類」「化身土文類」がいずれも本末に分れてゐるもので、縦八寸五分、横六寸五分袋綴の八冊本である。室町時代末期のものと想定されるが、筆者は未詳である。半葉六行で、一行十七字、それに反點送假名がつけられてゐる。本書の「顯淨土眞實教行證文類」六末の巻尾に、正應四年開板の跋文が写されてゐるのは、注意すべきことである。「教行證」の古版本としては從來いづれも江戸時代のもので、寛永版（十三年—一六三六）正保版（三年—一六四六）明暦版（三年—一六五七）寛文版（十三年—一六七三）が数えられる。然るに正應四年（一二九一）に、もし開板が行われたとすれば、寛永版よりも三百四十六年前の開板であり、聖人の滅（一二六二）後、三十年目に早くも開板されたということになり、眞宗においての聖典流布史上、きわめてめずらしい新事實を知るわけになるが、果してどうであらうか。こゝに、跋文を轉載する。（加點は略する）

今此教行證者、祖師親鸞法師選述也。立章於六篇、調卷於六軸、皆引經論眞文、各備往生潤色。誠是眞宗紹隆之鴻基、實

教流布之淵源、末世相應之目足、即往安樂之指南也。

而去弘安第六曆歲次癸未春二月二日、彼親鸞自筆本一部六卷從先師性信法師所、令相傳畢。

爲報佛恩、欲企開板於當時傳弘通於遐代之刻、有度々夢想之告矣。

千時正應第三天歲次庚寅冬臘月十八日夜寅起、夢云、當副將軍相州大守平朝臣乳父平左金吾禪門、法名果圓、屈請七口禪侶、被書寫大般若經。彼人數內被加於性海、而奉書寫真文畢。

爰、白馬一疋金錢一裏令布施之、覺而夢惺畢。同四年正月八日夜、夢云當相州息男年齡十二三許童子、來而令正坐於性海之膝上、覺而夢惺畢。

同廿四日夜、夢云、先師性信法師化現而云、「教行證開板之時者、奉觸子細於平左金吾禪門、可刻彫也」言已乃去、覺而夢惺畢。

同二月十二日夜、夢云、有二人僧、而持五葉貞松一本松子一箇、來與於性海、覺而夢惺畢。

依上來夢想、倩案事起、偏淨教感應之先兆、冥衆證誠之嘉瑞也。若爾者、機緣時至弘通成就者歟。仍奉觸子細於金吾禪門、即既蒙聽許、而所令開板也。然、此本者、以親鸞自筆御本、令校合、令成印板者也。庶幾、後世勿令加減於字點矣。本云 千時、正應四年五月始之、同八月上旬終功畢。

しかるに、いまこの寫本は、版本を底本として書寫したものであるが、その底本とした版本は原本の加點のまゝを使つたも

のか、或は加點を省いて白文のまゝで開板したものかの問題がある。たとえば「一」の「序」の「齊教濟苦惱群萌」についてみるに、右に「ヒトシク、クサイシ、ノ、ヲ」の讀假名があり、左に「タスク反、スクフ反」の訓があり、また「二」「教文類」の「獲德眞理也」の「德」の字に「證ヲ」という枚異があり「三」「捷徑」に「セチケイナリ」の讀假名、「トシ、スグデナリ」の訓がついている。これらは、專信手寫本の讀假名、訓と一致し、また「證ヲ」とある手寫本によつて校異を施したことが判る。原版本には「德」であつたから「德」とうつしなから、校異によつて「證ヲ」と傍書したことがわかる。そこで考えられることは原版本の本文の底本に使われたものは、「德」とある一本（散逸本と稱する、眞海・忍阿・教忍寫傳の一眞筆本）であつたかとおもえる。

次後に掲げる一本の加點をみると、「齊教濟苦惱群萌」に讀假名もなく訓もなく、また「獲德眞理也」とあり、「捷徑」にも同様両方ともないところなど、「散逸本」と相通つておる。

〔三〕顯淨土眞実教行証文類（江戸時代寫本）八冊

本書も、次前のものと同時に發見されたものである。ひとしく八冊本であるが、底本となつた版本が、すでに八冊本になつていたのである。一葉六行、一行十七行の割で書寫され、返點送假名のついている外、朱の書入も多い。「教文類」の尾題の下に「高田專修寺」の五字が寫されているのは、その底本

に、中興眞慧上人時代、下野から一身田に法寶物を移管される
とき、他のすべてと共に捺された墨印があつたことを物語るも
のとみられる。本書の筆者については、「行文類」乃至「眞佛
土文類」までの五冊は同筆であり、隨所の奥書によつて知るこ
とができる。

〔信文類〕時慶長第五龍集庚子初春中旬八日、本寺依常門跡
堯眞様尊命、不顧老筆拙書之汗顔々々、信樂院慶忍七十歳
〔證文類〕御本寺依常門跡様尊命、拭老眼書之、慶長第五聖
曆龍集庚子林鐘廿八日、信樂院七十歳

これによれば、慶長五年（一六〇〇）第十三世眞慧上人の命
によつて、當時七十歳の慶忍が書寫したものである。そして
「顯淨土眞實教行證文類」六末の尾題について、室町時代寫本
の巻尾に移されているものと同様の跋文が書寫されている。こ
れによつて、等しく版本を底本としてうつしたものであること
が知られる。なお、「教文類」と「化身土文類」の表紙見返し
に「惣外題ト此教ノ卷ト化身土二卷ハ堯秀上人御筆也」とある
堯秀上人は眞慧上人の嫡子で天正十年（一五八二）に誕生、慶
長五年（一六〇〇）の執筆とすれば十九歳のときである。師父
の命をうけて書寫されたものであらう。外題には、「顯淨土眞
實教一」おなじく五字を冠して、「行二」・「信本」・「信文
類三末」・「證四」とあり、ついで「顯淨土眞佛土五」・「顯
淨土方便化身本」・「顯淨土方便身末」とある。初一冊と後二
冊を、後の日の堯秀上人が書寫されたものである。本書の加點

をみるに、前書の同例をとると、「〔一〕」には、返點と送假名
「シ、ヨ」だけしかない。また「〔二〕」には、校異がなく「〔三〕
」には讀假名訓がなく、「ナリ」の送假名だけがある。その點、
散逸本の方に近い加點のようにみえる。開板のときの底本にあ
つた字が「德」であつたようにみえるが、同字異體の「惠イ」
という校異が施されている。全體的な對校をみなければ、早計
に論斷はできないが、推察をゆるされるならば、「散逸本」ま
たはその系統の眞本を底本とし、白文の「教行證」が、正應四
年（一二九一）の五月から八月にわたつて開板され、その一本
が高田から一身田に移され、室町時代にも江戸時代にも、その
版本によつて書寫が行われ、前者は専信手寫本により、後者は
散逸本によつて加點が移されたものとおもわれることは無理で
あらうか。且らく按ずるまゝに、所存を誌しておく。

〔四〕顯淨土方便化身土文類六末〔寫本〕一冊

本書は零本で、八冊本の内の一冊とみえる。半葉八行の書寫
があり、縦九寸八分横六寸九分の袋綴である。本書については
未詳、後日の檢尋に俟つ。

眞佛上人眞筆の部

〔五〕皇太子聖德奉讚〔鎌倉時代寫本〕一冊

本書は、開山親鸞聖人撰述の「皇太子聖德奉讚」を書寫した

ものである。上人の眞筆である。聖人に先だち、正嘉二年（一二五八）三月八日五十歳でなくなられた眞佛上人の眞筆であるから、聖人の在世中見寫をゆるされたものである。しかも本書の成立は、建長七年（一二五五）の十一月三十日ということが奥書であきらかである。随つて、上人の見寫は、おそらくは、その翌年上洛（「三河念佛相承日記」参照）のときであつたかとも思える。聖人自筆本が分散し、その斷簡が數ヶ所にのこっている今日としては、書寫の完本として、最も古い貴重なものである。「日本國歸命聖德太子、佛法弘興ノ恩フカシ、有情救濟ノ慈悲ヒロシ、奉讃不退ナラシメヨ」を初とする七十五首を収めている。外題の左下部に「釋眞佛」と署名してある。巻尾に題箋が貼付してあるのは、もと外表紙にあつた上人眞筆のものを、後、そこに移し、筆跡を尊重して保存するためとおもえる。別に傳來する願智上人手寫本に圈發が移されてあるのにくらべてると、本書には、原本にあつたとおもえる圈發が、移しとられていない。鳥の子を使い、一枚の右左に一首づゝをうつし、縦九寸四分横六寸六分で袋綴になつてゐる。

〔七〕經釈文閣書〔鎌倉時代寫本〕一冊

本書は、上人が恩師聖人の膝下にあつて、親しく經文釋文の加點文意等其他について問書せられたものである。その内容は二十五項にわたつてゐる。次に列記するものうち、ゴシック體の數字は、その項目順位を示すものとする。便宜上「大正新

修大藏經」所收順に集めてみると、左のとおりであるが、「藏」の下の數字は、上は卷數、下は頁數を示すこととする。原文の、「みあたらない」のがある。また、別の箇所、その文のみあたつたものは、それを附記しておく。

- 業報差別經言（一三）「佛爲首迦長者說業報左別經」（藏一）みあたらない。「阿彌陀經通贊疏」中（藏三七・三四）にある。●法句譬喻經言（一五）（藏四）みあたらない。●小品經言（一一）「摩訶般若波羅蜜經」一（藏八一・一二七）
- 「大智度論」五（二五・一九八）。●法華經言（八・二三・二四・二五）「妙法蓮華經」二・二・四・四・六（藏九一・五・一一・三五・三七・五四）。華嚴經言（八・一二）「大方廣佛華嚴經」一四・六〇（藏一〇・七二・九一七八八）。●大經言（九）「佛說無量壽經」下（藏一二・二七六）。●平等覺經言（二一）（藏一二）みあたらない。逸本の帛延譯「佛說無量清淨平等覺經」の文獻。●涅槃經言（七・一〇）「大般涅槃經」二〇・三二（藏一二・四八五・七二八）。●蓮華面經言（一一）（藏一二・一〇七二）。●觀佛三昧經言（二〇）「觀佛三昧海經」（藏一五）みあたらない。毘摩師言（四）「無量壽經連義述文贊」下（藏三七・一六九）。●善導法事讚云（二）「轉經行道願往生淨土法事讚」下（藏四七・四三・五）。●親鸞聖人曰教行證言（三）「願淨土眞實教行證文類」（藏八三・五九七）。●觀世音菩薩往生淨土本緣經言（一八・一九）（續藏經八七・二九〇）。●諸經言（一四）類文

「大般涅槃經」二（藏一二一六二）。●四依供佛畧頌（五）本文「大般涅槃經」六（藏一二一六三七）。●燒法門誦文（一六）。●親鸞夢記云（一七）。

本書の最後、第二十五項は「法華經」の「藥王菩薩本事品」の文であるが、「如來滅後後五百歲中、若有女人、聞是經典如說修行、於此命終、即往安樂世界阿彌陀佛」の三十五字が白文のまゝである。女人成佛をとくめずらしい文として、ひきつゞき「大菩薩衆圍繞住處、生蓮華中寶座之上」の十六字がうつされねばならなかつたのではなからうか。中途で筆をとめ、またこの項にかぎつて加點が移されていない。こゝに半端の白文をみることは、豫定する辭去の時刻の切迫する瞬間まで、筆をはこばれつゝ、恩師の膝下をはなれかねていた、眞佛上人の容姿がみえるような心地するのは、幻想にすぎないであらうか。本書は「皇太子聖德奉讃」にひきつゞいての書寫ともうかゞいたいようである。

この二十五項のうち（一二）（一五）（一七）の三項は、それゝ書中からぬきだされている。次のとおりである。

〔七〕華嚴經言〔『經釈文聞書』第十二項〕一卷

この一文は、「華嚴經」新譯卷第十四の「賢首品第十二之一」（藏一〇一七二）にある。「教行證」の「信文類」（高田山藏版廿三丁左）に引用されている。文殊師利菩薩の試問にこたえ佛道修行のすぐれた功徳を、偈頌を以て演暢するうちの一頌で

ある。「信」は、聖人の信念の中核である。他力回向の極致は信であり、報恩謝徳の基調は信である。いま、その信を「道元功徳母」と絶讃する、この經文を抄出して、訓點を施し、自督の釋義を加えたものを、眞佛上人に見寫せしめられたこととおもえる。聖人は、この小品の普及を念ぜられたようである。専修寺に藏する『尊號眞像銘文』聖人自筆本の巻尾に、別筆でうつされている三文の隨一がこれである。また『祖典三書合本』（伊藤義賢氏編）に收める『淨土文類聚鈔』延慶二年書寫本（別に玻璃版がある）の巻尾にも、同じ三文がうつしとられている。「華嚴經言」の一項は、いま卷子本になつていているが、『經釋文聞書』中の附箋に「コ、ノ所老枚半、華嚴經言ト申候御文言ノ外題、京都御開帳ニ付ヌキトリ、ダイヒヨウゲニ申ツクル也、元文三年四月」とある。

〔八〕法句譬喻經言〔『經釈文聞書』第十五項〕一葉

次前の一項と同様にぬきだされたもので、時世の附箋に「コ、ニアル御文半枚、法句譬喻經言ト、四句ノ文也、京都御開帳ニ付キヌキトリ、ダイヒヨウゲ申付ルナリ、元文三年四月」とある。『法句譬喻經』（藏四）に、この文が見常らないのは、見るものの粗漏であらうか。原文の所在について、なお檢尋しかねている。無常の世間法に迷惑せず、常住の出世間法を愛樂することを説いたもの、病・老・死・別離のかなしみが、健康・精力・生・會合のよろこびと相對して、必然に到來するのが

世間の常法であることを、教えたものである。「萍」(スギ、おとろう)字に「クダク」(砂、サイ)の訓のつけてあるのは傳寫の途次、あやまつたものであらう。

〔九〕親鸞夢記云(『經釈文聞書』第十七項)一軸

六角堂夢想は、祖傳のうちにあつて、後人の假作に過ぎないもののようにいわれていた。然るに、『經釋文聞書』に「親鸞夢記云」の一項のあることによつて、それは考えなおされねばならぬこととなつた。眞佛上人は、恩師聖人に先だち、正嘉二年(一二五八)三月八日、五十歳で往生された。その聞書せられたものにある、その一項によつて、聖人の手許に「親鸞夢記」の存在したことが知られるからである。書中たゞひとつの聖人の史傳に關する文献である。有情という語が使われているから、傳授の行われたのは、聖人の晩年であることが察せられる。七百年來專修寺に傳わるもので、祖傳を彩る夢想が、文献としてのこされていることは何よりである。聖人眞筆の「淨肉文」と共に、在家のすがた「食肉帶妻」のうちにも、ふかいつゝしみが秘められていることを物語るものである。附箋に「聖人六角堂御夢想之記、此所ニ有之、志枚半也、依仰拔出シ御掛物ニ被仰付也、享保十四巳酉年五月廿四日」とある。(昭和三十三年五月十三日光雲書堂にて生桑完明稿)

(理事會)

五月廿五日午後一時より大谷大學會議室で理事會が開かれたこの會合では、さきに催された第四回大會に就ての後始末として次の如きことが議せられた。

①第四回大會會計報告

平松委員より、別記の通りの報告があつた。第四回大會開催に先きだつて、今後なるべく大會々場を引き受けて頂いた本山に經濟的負擔をおかけしないようにと申合わされていたのであるが、實際に運営してみると、相當の負擔をおかけ申した結果となり、高田本山に對して、委員一同恐縮の意をのべるとともに、心よく援助して下さいと御好意に對して深く感謝の意を表した。

②第四回大會に就ての反省と、次回の大會に關する案件

イ、大會參加費の件、平松委員より今度は理事會の協議にもとづいて正會費と臨時會員とを別に扱つたが、これは事務上極めて繁雜且つ不便であつた由の報告があり、この點に就いて再考が申合された。

ロ、シンポジウムは豫想以上の成功であつたことが認められたので、次回にも催すことが約束された。同時に、大會の期日も期日にしてはどうかということが議された。尚二日間にした場合、特別講演會を開いたらどうかという發案も出た。

講演會の性格、及びその時間割などに就て、今後研究することが申合された。

③各派より寄附金を頂くことに就ての件、

從來、東西兩本願寺と高田派の三派だけから寄附金を頂戴していたが、眞宗各派連合の名實に相應しい態勢として、各派より適當に寄附を抑ぐ運動をすることが約束された。

(4)眞宗研究(機關誌)の編輯の件、
 先年通り、大谷派關係の委員に一任されることになった。

(會計報告)

(昭和卅一年七月三十一日眞宗研究第二輯發表……以降)

○收入の部

繰越金(眞宗研究第二輯に發表され)
 た七月卅一日現在の殘金) 一四六、六一二圓
 會費 七一、五〇〇圓

眞宗研究頒布費

八〇〇圓

寄附金

一〇〇、〇〇〇圓

(内譯)

本願寺派本山

五〇、〇〇〇圓

大谷派本山

五〇、〇〇〇圓

合計

三三八、九一二圓

○支出の部

眞宗研究(第二輯)印刷代

七五、〇五〇圓

眞宗研究(第二輯)發送費

九、二五〇圓

通信費

八、一〇四圓

會議費

一三、五六〇圓

交通費

二、七五〇圓

彙

報

謝禮費

八〇〇圓

第四回大會案内狀及び印刷代
 研究發表要綱

五、九〇〇圓

テープレコードのテープ代

三、三六〇圓

文房具

一、〇五五圓

合計

一二九、八二九圓

差引殘金

二二九、〇八三圓

(上杉記)

第四回眞宗連合学会大会會計報告

○收入の部

高田派本山より助成金

五三、〇一四圓

大會參加費

一六、九〇〇圓

懇親會參加會費

七、二〇〇圓

晝食辯當等賣上金

四、三四〇圓

記念寫眞代金

三、六〇〇圓

合計

八五、〇五四圓

○支出の部

會場設備費

一一、六三五圓

參加記念品調製費

二一、〇〇〇圓

寶物展觀目錄、會場案内圖印刷費

三、七〇〇圓

會員徽章購入費

一、三六二圓

接待用茶菓費

四、五〇〇圓

懇親會費
畫食辯當等代金
記念寫真代金
事務連絡通信費
謝禮
合計

一五、八四〇圓
九、九一二圓
三、六五〇圓
三、四五五圓
一〇、〇〇〇圓
八五、〇五四圓

新入會員

新潟市西堀七
三重縣描名市八幡町
大谷大學內
金澤市東蚊瓜町
廣島市細江町一 西向寺內
愛知縣江南市布袋本町一
福井縣足羽郡足羽村稻津
鈴鹿市白子町六五三八
三重縣一志郡久居町木村 法專寺
北區小山西之町四一 顯眞學苑
佐賀縣牛津局區內
大谷大學
龍谷大學內
伏見區大阪町本願寺伏見別院

今湊 良敬
池田 勇諦
秦野 瑩璋
西道 昌云
渡邊 顯正
渡邊 一道
鷺山 敦悟
鷺尾 弘範
加藤 源道
村田 慈雲
宗 正英
桑戸 澄性
山口 益
佐々木 藏孝
道端 良秀

岐阜縣本巢郡北方町 西順寺
大牟田市明治市 行信寺
東京都文京區青柳町五番地
福岡市島飼本町一丁目
富山縣中新川郡上市町竹鼻
神戶市葺合區國通り二ノ二
福井市吉野中町(三門徒派)
大阪市阿部野區文の里二ノ二 加々田方
津市片田田中町
大阪市都島區都島中通四ノ三四 善久寺
鈴鹿市三日市町
四日市尾平

三浦 乘雲
宮下 正謙
篠塚 榮智
森岡 清美
高田 秀毅
竹島 宗研
藤井 敏成
高橋 覺念
日野 昭
田中 英丸
森本 顯正
江上 幹雄
長松 時見

〔口 繪 解 說〕

顯淨土眞實教行證文類序 解説

專信房專海筆手寫本 專修寺藏

開山親鸞聖人は、九十歳の長壽を保たれ、特に晩年は、専ら撰述に精進せられたが、その主著と目されるものは、『顯淨土眞實教行證文類』である。眞佛・顯智而上人は、『教行證』の略稱を使われたから、いまでもそれに習う。他の多くの撰述には奥書があり、年時・年齢の明記されているのを例とするが、『教行證』には、奥書が無い。奥書が無いということは、未完稿本を意味するともいわれる。從來、本書の撰述年時については、種々の異説があり、書中にみえる「元仁元年」（一二二四）を中心として、關東時代からさかのぼつて越後時代の起稿、或は關東時代からおくれて歸洛後の撰述とみる説がある。また、存覺の『六要鈔』に、「此書大概類聚之後上人不幾歸寂之間不及再治」とあることから、きわめて晩年のものという見方も行われている。何れにしても、「元仁元年」の文字は、注意すべきものである。

現存する、種々の文献によると、『教行證』には、たえず加筆が施され、主著と目される程の撰述だけあつて、その推敲は、起稿以來、おそらく晩年までつづけられたのであろう。聖人の、本書に注がれた熱意の程がしのばれるようである。主著として遺すため、完稿本としてみずから認めるまでにはいたらないで終わられたものではあるまいか。一般大衆のための「文意」と「和讃」の類とは異り、全篇漢文を以てし、普及性を帯んだものではないが、たゞい奥書を付けるまでには至つていなくても、一應の稿了のものとして、特に見寫をゆるされた事實が、二回みとめられる。尊蓮のそれは、原本が失われている。現在、專修寺に蔵するものは、そのひとつである。從來、聖人の自筆稿本のよ

うにいわれていたが、文献によつて、そこにはもと「以彼六卷草本寫書之、筆師專信之、建長七歲乙卯六月廿二日午前畢書之」という奥書のあつたことが知られ、專信房專海が、建長七年（一二五五）聖人八十三歳のときに、見寫をゆるされたものであることが、判明した。すなわち、聖人の在世中に見寫をゆるされたもので、現存する唯一の聖典である。坂東報恩寺傳來の草稿本、現に東本願寺に蔵するものは、聖人の自筆稿本として唯一のもので、專修寺藏の專信手寫本は、それにつぐ貴重な法寶物といわなければならぬ。いま、この玻璃版は、專修寺藏『教行證』の「序」のはじめの一頁を複製したものである。「高田專修寺」の墨印は、中興眞慧上人のとき、下野の高田から伊勢の一身田へ法寶物を移すに際して、その一々に捺されたものとおもわれる。用紙は鳥の子を使い、袋綴になつてゐる、誂表紙の前表紙に、外題が書かれてゐる。六冊にわかれており、内容は、往相・還相の二回向、教・行・信・證の四法にわたつて、淨土眞宗の要義を開示せられたもので、まず「序」と「顯眞實教一」、ついで「顯眞實行二」、「顯眞實信三」、「顯眞實證四」、「顯眞佛土五」、「顯化身土六」と順序されてゐる。本書の四箇所に、顯智上人の眞筆で、「親鸞御入滅、弘長二歲壬戌十一月廿八日午時、御年九十歲也、同廿九日午時、遠江國池田住僧專信、下野國高田住僧顯智、御舍利藏畢」という識語がある。專信手寫本は、ひきつづき顯智上人によつて傳持されたようにもおもえる。しかし上人の所覽本で、それとは別のものがあつたようである。それは、上人の手記「聞書」・「抄出」に收録された『教行證』抄出の文と專信手寫本の間に、文字なり加點なりの上に、異同がある點から考えられることである。こゝに眞宗連合學會第四回大會記念として、專修寺藏『教行證』專信手寫本巻頭の「顯淨土眞實教行證文類序」一葉を原寸大に複製し、會員に頒つたものである。

